

仮面ライダーW B1
ack ETERNAL

F/U 駄文製造機

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

風都の町を恐怖に陥れた最強最悪の仮面ライダー『エターナル』

そして再びその最悪の仮面ライダーが風都を恐怖の色に染める・・・

目次

プロローグ

1

第1話

7

プロローグ

あの日、兄さんは2回目の死を迎えた

兄さんを殺したやつは風都を救った英雄として人々から感謝された

だが俺は目の前で兄さんを殺された悲しみで涙が止まらなかった

その時に俺は誓ったんだ

(兄さんを殺したあいつらだけは絶対に許さない！そして兄さんの意思は俺が引き継ぐ！)

そうこの町の・・・風都の英雄・・・

どんなに時間がかかってもいい、やつらを必ず殺してやる

まっている仮面ライダー・・・ETERNALが蘇るそのときまで・・・

そして月日が流れて5年後、とある廃工場にて

全身を黒いスーツで覆った怪しい男とコートを着た若い女性がなにやら取引をして
いた

「それで・・・例の物は？」

女性がそう聞くと男は持っていたアタツシユケースを相手に見せるように開いた
中には赤、青、黄、白の四色のUSBメモリが入っておりそれぞれH、T、L、Mと
書かれていた

「・・・これが一時期、風都を騒がせたガイアメモリなのね」

「ああ、しかもこれはただのメモリじゃないあの風都タワーを制圧したNEVERが使用していたT2と呼ばれるメモリだ」

「T2・・・ふふつ、値は張ったけどいい買い物だわ」

そしてアタツシユケースに手を伸ばす

すると建物の入り口が勢いよく開けられ赤いジャケットに身を包んだ男が入ってきた

「ここか？ガイアメモリの密売人がいるのは」

「?!誰だ！お前は!!」

「俺に質問するな」

「んな?!ふざけやがって!!!」

そう言うのと黒スーツの男はガイアメモリを取り出し起動させた

『MASQUERADE!』

そして右首筋にある接続マークにメモリを繋げると男の姿が変化しマスクをかぶつ

た怪人になる

「この場を見られたからにはタダで帰られると思うなよ!!」

そう言つて殴りかかってくるマスカレイドドーパント

だがそのパンチを右に左にと体を捻りかわしていく赤いジャケットの男

「はあはあ・・・くそつ当たらねえ、お前はいつたい何なんだ・・・」

「俺に質問するなど言つたはずだ、だが教えてやろう、俺は 照井竜 警察だそして・・・」

アクセルドライバーを腰に巻き、懐からAと書かれたガイアメモリを取り出す

「この町、風都を愛する、仮面ライダーだ! 『ACCEL!!!』 変・・・身!!!」

ベルトにアクセルメモリを差し込み右グリップを回す

すると光に包まれアクセルに変身を遂げた

「さあ・・・振り切るぜ!!!」

エンジンブレードを振り回し相手を切っていく

「ふん!・・・はあ!!」

「ぐっ・・・」

2〜3ほど連続で切り相手がひるんだところで

相手が怯んだ隙にアクセルはベルトのレバーを引いた

『ACCEL! MAXIMUM DRIVE!!』

「はあああ!!!」

跳び後ろ回し蹴りで相手を蹴り飛ばす

マスクレイドドーパントはそのまま壁までふつとび倒れた拍子に壊れたメモリが体外に飛び出し

メモリを使用していた黒スーツの男はそのまま気絶した

「・・・女がない?!」

ドーパントに気をとられ見失ってしまった

自分の失態に舌打ちする

「町の英雄がこんなミスをするとはね・・・がっかりしたよ」

そう言いながら現れた少年に警戒するアクセル

それもそのはず少年は先ほど逃がした女の首を片手で締め上げるようにして現れたのだから

女は怯えた表情で少年を見つめ震えていた

「貴様は何者だ?・・・」

「すぐにわかるさ、それよりもホラー!プ・レ・ゼ・ン・ト!」

そう言うとう女をアクセルの方に放り投げた

女は悲鳴を上げるがそのまま地面に激突し気を失ってしまった

「力を加減したから死んではないはずだよ」

「貴様……いくら犯罪者だとしてもやりすぎだぞ、少なくとも身柄は拘束させてもらおう！」

「できるならどうぞ、でも無理な話だけどね」

そういつて少年は懐からありえない物を取り出した

「なっ！ロストドライブだと?!どこでそれを?!」

「さあね?捕まえて聞いてみたら?まあここでお前を倒すんだけど……変身!!!」

『ETERNAL!』

「?!」

そのままスロットにメモリを入れて傾け変身する

変身したその姿はあのエターナルそのもの……しかし

「黒い……炎……」

以前のエターナルと違い少年の変身した姿は青い炎ではなく黒い炎になっていた

「風都の悪魔、今ここに再来……ってね」

「……っ！ふざけるなあ!!!」

怒りに身を任せ攻撃を仕掛けるアクセル、だが数十秒後には変身が解けるほどのダメージを受け倒れてしまった……

「マジで弱すぎ、伝聞のために生かしてやるけどホントに兄さんはこんなやつらに負けたのかな？」

「くそ……待……て……」

「伝えておけ、もう一人の仮面ライダーに……悪魔の再来だと」

そう言い終えると溝内に蹴りを入れて完全に気を失わせたあと

少年は変身を解きその場を後にした

第1話

風都の街に大粒の雨が降る中

俺は照井の大怪我の知らせを聞き、病院へとハードボイルダーを走らせていた

到着する頃には俺の体はずぶ濡れになっていたがそんなこともお構いなしに照井がいる部屋まで急ぐ

病室のドアを開け俺の目に飛び込んできたのは泣きじやくる亜樹子と全身を包帯で巻かれている照井がベットの所で寝ている姿だった

「翔太郎君・・・竜君が・・・竜君が・・・」

「落ち着け亜樹子！ いったい何があつたんだ！」

「わかんないよ・・・ガイアメモリの裏取引に行くつて聞いてただけだもん」

泣きながら答える亜樹子を落ち着かせて照井の姿を確認する

まさに満身創痍、普段ドーパントを相手に戦っているこいつがここまで傷つけられるとなると相手は只者じゃない

見ただけで分かるほど怪我の様子はひどかった

「安心しろ・・・そのドーパントの方は俺達が必ず何とかしてやるから」

「違う・・・相手はドーパントじゃない・・・」

「照井!!意識が戻ったのか!」

「俺に質問するな、とも言っつてられんなこの状況では・・・左、お前たちに知らせておきたい事がある」

「そういつて上半身を起こそうとするが亜樹子が止めにはいる、今の状態では起き上がることは無理だろう」

照井も諦めたのか横になったまま話をしだした

「今回の敵だが、ドーパントじゃない、仮面ライダーだ」

「仮面ライダーだと?」

「かつてお前らが一度倒した白い悪魔だ、ここまで言えば分かるだろう」

「まさかエターナルか?!T2メモリはメモリブレイクしたし大道克己もこの世にはもう・・・」

「メモリの方は知らないが変身者の方は別人だ、若い少年で大道の事を兄と呼んでいた」
「大道の弟だと? 奴に兄弟なんていたのか?」

「さあな、とにかくT2メモリの密売場所に現れたんだ、お前らもいくつか回収していただろう奪われないように用心しておけ」

「ああ、そうする」

「現場には刃野刑事達がいる話は付けておくから詳細は彼らに聞くといい、俺ができるのはここまでだ」

「助かるぜ照井、ゆっくり休んでくれ」

言い終わると照井はやはり無理をして疲れたのかすぐに寝てしまった

「翔太郎君、フィリップ君にもよろしくね私は竜君が心配だからここに残るわ」

「分かった、照井を頼むぞ・・・じゃあ俺は事務所に戻る、なにかあったら連絡する」
病室を後にして病院のロビーに向かう

ロビーでは携帯の使用が可能なので今の事を相棒に伝えようと思ったからだ
数回のコール音の後呼びかけに応じてくれた

「ああフィリップ、照井の方は無事みたいだ」

『それはよかった、それはそうと依頼がきたよ、それもかなり珍しい部類のね』

「いや、悪いがそれは後だ、それよりも『今依頼主が事務所にいるんだ、変わるね』あつ
おい！」

多少強引に変わった事から考えるにフィリップが相当苦手な人なのだろう

仕方なく電話の向こう側にいる依頼人の話をつけようとしてみる

「えーと、鳴海探偵事務所の左翔太郎です、依頼の方ですが実は急ぎの事件がありました
て・・・」

『失礼ですがこちらにも急ぎなので、こちらにT2のメモリが数本あると伺いました、つきましてはそのメモリを回収させていただきたく……』

「……お前、一体なにもんだ？」

T2ガイアメモリを回収すると今のタイミングで話してきたことにただ事じゃないと判断し自然と体が警戒態勢に入る

電話の相手は若い女性でガイアメモリの事を知っているだけで警戒する理由は十分だった

『これは、申し遅れました私は国際特務捜査官の柊木さやかです、もちろん本物の捜査官ですよ左翔太郎君』

このとき風都の街が流す大粒の涙は俺たちに悲劇が始まる事を教えるサインだったのかもしれない

そのことに俺たちはまだ気づいてはいなかった